



271

小学校高学年 （中学生向け）

年組

NHK連続テレビ小説「あなぱん」の題材で、時代を超えて愛される「アンパンマン」の作者やなせたかしさん（1919～2013年）の人生を丹念に追った「やなせたかしの生涯」（文春文庫）をノンフィクション作家の梯久美子さんが刊行した。幼少期や戦中

の体験、残された詩の数々と周囲の人との関わりから、アンパンマンが生まれた理由が浮かび上がってくる書き下ろし作品。梯さんは「時代を背負いながら軽やかに生きたやなせ先生の姿を知ってほしい」と話す。

アンパンマンに描く死、生

パンマンのマーチ」の歌詞に師の歩みとメッセージに向き衝撃を受けたことがきっかけの一つだった。「たとえ胸の傷がいたんでも」の一節は、たやなせさん。心をなぐさめもともと「たとえいのちがてくれたのは読書だった。20代終るとしても」と書かれていた。物語の根底に「死」がある。自分の頭で考えない「生活」に気づき、あらためてを強いられしたが、「正義」と

① 梯さんが評伝刊行

梯さんは「心から先生と呼べる存在」とやなせさんを敬愛する。高校時代はやなせさんが編集長の詩誌「詩とメルヘン」に投稿し、後に版元のサンリオに入社。編集者として仕事を共にした。忘れられないのが「天才であるより、いい人であるほうがずっといい」という言葉だ。「まずは人としてどうあるべきか。仕事の仕方や人への接し方を学びました」

命の輝き伝えたやなせさん

されたことが終戦後に反転②「ひっくり返らない正義」とは何かを自問し、一つの答えが「おなかがついている人に食べ物」と思っています

を分けること」だった。かわいものや美しいものを大切にしたい姿勢も「戦争に対するプロテスト（異議）」だと梯さんは言う。戦争が軟弱と否定したものを守り、表現し続けたことは「先生らしい強さ」でもあった。

今作では周囲の人も丁寧に描いた。絵がうまかった父や、幼い自分を伯父に預けて去った母、戦争で失った弟。復員後に就職した高知新聞の記者仲間だった妻の暢さん……。取材すると、それぞれが抱える「戦争の傷や歴史の影」が見えた。「戦争に運命を変えられた人、戦後の日本を支えた人たちのことを③戦後80年を機に考えて」と話す。

設問

- 【1】見出しに「梯さんが評伝刊行（棒線①）」とありますが、何という題名の本を出版したのでしょうか。リードから探して答えましょう。
- （ ）
- 【2】梯さんがサンリオに入社して、やなせさんと仕事を共にしたとき、やなせさんに言われた忘れられない言葉を書きましょう。
- （ ）
- 【3】引っ込み思案な子どもだったやなせさんの心をなぐさめてくれたのは何でしょう。
- （ ）
- 【4】やなせさんが自問して見つけた「ひっくり返らない正義（棒線②）」とは何かの答えを書きましょう。
- （ ）

- 【5】「戦後80年を機に考えて（棒線③）」とありますが、梯さんはどんな人のことを考えてほしいと思っているのか二つ書きましょう。
- （ ）
- （ ）
- 【6】梯さんはアンパンマンの次の二つのことは何を象徴していると考えているのでしょうか。見出しの言葉から探して答えましょう
- （1）困っている人に自らの顔を食べさせること
- （ ）の象徴
- （2）ジャムおじさんという他者の力でよみがえること
- （ ）の象徴

【発展課題】次の本も読んで、感想文を書いたり、友達や家の人と感想を話し合ったりしてみましょう。

「勇気の花がひらくとき～やなせたかしとアンパンマンの物語～」（梯久美子著、フレーベル館）